セーヌ川畔下水道博物館は今度もまた閉まっていた

（2009 年 9 月 27 日～10 月 1 日）

モンパルナス駅より南を動き回った 3 泊 5 日。特段のトピックはなく、唾を吐きながら走ったタクシー運転手くらいか。トピックがない代わりに、地名などの由来を調べてみました。とくに断わりがない限り、文・写真などの出典は Wikipedia。注釈多く煩わしい段御免。

9 月 27 日（日）

今回の渡仏は昨年のペンギン部屋の顛末（「エールフランスとペンギンの記.pdf」）からほぼ 1 年。成田空港での搭乗ゲートもほぼ同じ辺り。あのときの光景を思い出し含み笑いをする。

水戸駅からの高速バス・ローズライナーはほぼ満席だったが、シルバーウィークを終え、観光客が多いという風ではない。空港もそう混んでいない。

昨日のうちに自宅でオンライン・チェックインを済ませておいたし、今回は荷物がふたつとも機内持ち込みなので、チェックインは実に簡単、即刻保安検査と出国審査をくぐる。搭乗ゲートへ向かう前に Delphine（デルフィーヌ）への土産を探す。

彼女は夏にパートナーと別れた。別れた後に妊娠が分かった。彼女は母親になるのをとても喜んでいるし、幸せに思っている。養育に国の手当てが手厚いフランスならではだろうし、それに職場も女性が働くことを前提とした体制になっているのだろう。ともかく彼女の勇気に乾杯、幸せを祈る。

今彼女は妊娠たぶん 7 ヶ月目だが、そのための土産など思い浮かばない。前回は日本茶の缶入りを持って行った。彼女の場合土産はやや難しい。姪っ子のために浅草で日本の伝統的な小物や羽織を求めることはあっても、彼女自身は都会派で、東京に来た時も六本木の方が似合う。パリでいつも案内してもらうレストランもそういった風だ。

どういうものか、ビール派の彼女は日本で売っているお徳用のおつまみが好きで、今まで何度も買っていった。今回はイワシセンベイとクンサキにした。そういう彼女に持っていくビールのつまみ以外の土産は悩む。近代日本らしく「ハイテク」製品にしようと物色。自分では決して買うことがないようなもの。賑やかな色使いの腕時計があったが、スイス製なのでやめた。結局、バンダイ製の音と光に感じて動く電気仕掛けのムシ。まぁ、一度試せばそれっきりでしょうな。それにジージー、ジージーとうるさくてたまらない。気が立っているときには手で思いっ切り払いのけてストレス解消にどうぞ。1,900 円也。

そう言えば土産物屋に赤ちゃん用の缶入りミルク粉を売っていたが、あれは渡航用乳児のためか？お母さんにしてみれば、日頃使い慣れている国産のものということか。

搭乗ゲートは 15 番。エールフランスのサロンで少しの時間を過ごす。あまり居心地がいいというものでもない。ハッと気付いたのだが、ホテルの情報を持ってくるのを忘れた。ホテルの名前と最寄りの地下鉄駅は覚えているが、それでは辿りつけない。同行者がいると思うとその辺り気が緩んでしまう。

搭乗口で同行の同僚 M 君を待つ。現れて早速ホテルの場所を聞く。彼はホテルから届いた予約成立を知らせるファックスの写しを持ってきていたので、その中にホテルの住所が記されていた。これでタクシーも利用できるということだ。彼はアクセスマップをプリントアウトして持って来ていたが、しかしそれは別の「Avenir Hotel」だった。「Avenir」（未来）と名乗るホテルはパリ市内にたくさんあり、目当てのホテルの近くにも何軒かあることに僕は気づいていた。ともかく空港へ着いたらバスで市内まで行く。

機内へ。目の前が隔壁になっている席（バルクヘッド）。前が広いのはいいが、雑誌が入っているポケットまで遠くて手が届かないな。窓の外は眼の前にエンジン。携帯電話でパシャリ（右写真）。飛行中にケータイ使っちゃいけないんだよな。いかんですね、大人がこういうことをしちゃ。

映画は 1 本だけ。『ナイト ミュージアム 2』。面白くなかった。

書面をふたつ片づけたものの、このフライトでは、映画を観る、眠る、食べる、仕事をする、のどれかに徹底することなく中途半端な機内生活だった。

予定通り夕方 5 時頃にシャルル・ド・ゴール（Charles-de-Gaulle[1]）空港に到着。23℃。暑い。

---

[1] シャルル・アンドレ・ジョゼフ・ピエール＝マリ・ド・ゴール（Charles André Joseph Pierre-Marie de Gaulle, 1890-1970）：フランスの陸軍軍人、政治家。フランス第五共和政初代大統領。フランス建国史上最も偉大な指導者の一人。身長約 2 m。強権的指導者、国営化推進、独自路線。

第五共和制は、1958 年にシャルル・ド・ゴール将軍がアルジェリア戦争を背景に第四共和政を事実上打倒し、新たに作られた現在のフランスの共和政体。第四共和政に比べて立法権（議会）の権限が著しく低下し、大統領の執行権が強化され、行政・官僚機構が強力なのが特徴。

第二次世界大戦における緒戦の戦功により、フランス軍史上最年少の将軍となる。1940 年 6 月、ナチス・ドイツのフランス侵攻に対するイギリス軍の協力を得るためロンドンに飛ぶ。しかし 6 月 15 日に首都パリが陥落。そのままイギリスへ亡命することを決断、亡命後直ちにロンドンに「自由フランス国民委員会」を結成し、ロンドンの BBC ラジオを通じて、対独抗戦の継続と中立政権ではあ

預けた荷物はないので待つ必要もなく、すぐに空港のインフォカウンターへ。ホテルの最寄りの地下鉄駅はメトロ 12 番線のコンヴァンシオン（Convention[2]）駅ということはわかっていた。空港と市内を結ぶエールフランスのシャトルバスで市内のどこまで行くのが近いのかと聞く。モンパルナス（Montparnasse）駅。

バスの往復運賃は€27。乗車時に払い乗り込む。前回と違って空港内の他のバス停には停車せず、高速道路で一気に市内へ向かう。M 君としゃべっていてバスがどこを走っているのか全く気に掛けていなかった。ふと外を見ると、商店が並び人通りが多いがおそろしくゴミが散乱した通りを抜けた。「こういうところには住みたくないな」と思える。

パリはどの通りにも通りの名前を書いたプレートを角に貼り付けている。少し暗くなりかけて見にくいが、「Porte de Montreuil[3]」（モントルイユ入口）と読めた。そこから今度は地図とにらめっこだ。外はだんだん暗くなり、バスの中も暗くなる中で、二人で散々探した後ようやく自分たちの走行地点を地図上でみつけた。空港からノール高速道路を西南へ下って、パリ市内の周囲を走る環状道路（Boulevard Périphérique）を時計回りに辿り、パリ市の真東に当たるところに、Place de la Porte de Montreuil（モントルイユ入口広場）がある。ここから市中心部へ折れ曲がったようだ。折れ曲がったところは Avenue de la Porte de Montreuil（モントルイユ入口通り）でこれがすぐに Rue L'avron[4]（アヴロン通り）という、広いが工事中の、ここもまた住みたくないなと思える通りを走った、はず。「はず」というのは、気がついたと

きにはバスはディドロ通り（Boulevard Diderot[5]）を走っていたのだ。Place de I'lle de la Réunion とかいう広場で進路を変えたか。このモントルイユ入口からアヴロン通りがひどく混雑していて時間を費やした。

ディドロ通りを市の中心部へ進み、いよいよカフェがひしめきあい、道はバス運転手にとっては腕の見せどころのように狭くなり、賑やかな辺りに。と思っていたら、バスはリヨン駅（Gare de Lyon）に停車。リヨン駅（上の写真）は、フランス南東部、つまり地中海、イタリア、スイス方面へ向かう国鉄駅。かつて僕は南仏のマルセーユ、アヴィニオン、エキサンプロヴァンスとの TGV での行き来にはこの駅を使ったね[6]。

リヨン駅で何人かの客を降ろして、オーステルリッツ橋（Pont d'Austerlitz[7]）でセーヌ川左岸へ渡り、オピタル通り（Boulevard L'Hôpital：病院通り）を南下。左手にオーステルリッツ駅（Gare d'Austerlitz：下の写真。写真のように正面からは見えないが。）。この駅はフランス南西部、オルレアン郊外、トゥールなどを

るものの親独的なヴィシー政権への抵抗をフランス国民に呼びかけた。イギリス議会や閣僚は事を荒立てることを恐れ、それを中止させようとしたが、イギリスのウィンストン・チャーチル首相の指示によって放送は強行された。

1944 年 6 月、連合軍によるヨーロッパ大陸への再上陸作戦であるノルマンディー上陸作戦が成功。祖国に戻り、自由フランス軍を率いてイギリス軍やアメリカ軍などの連合軍とともに戦い、同年 8 月 25 日、ついにパリ解放。ド・ゴールは翌 26 日に自由フランス軍を率いてパリに入城し、エトワール凱旋門からノートルダム大聖堂まで、ドイツ軍の残党が放つ銃弾を意に介せず凱旋パレードを行い、シャンゼリゼ通りを埋め尽くしたパリ市民から熱烈な喝采を浴びた。確かこれを描いた映画があったような。

空港の他に、フランス海軍の原子力空母の艦名、薔薇の品種名、エトワール凱旋門のある広場（シャンゼリゼ通りの入口でもある。かつてはエトワール広場と呼ばれていた）であるシャルル・ド・ゴール広場、セーヌ川にかかるシャルル・ド・ゴール橋、その他、フランス国内に彼の名を冠した道路や広場が無数。国外でも、カンボジア・プノンペンのシャルル・ド・ゴール通りなど、フランス語圏を中心にド・ゴール由来の名を持つ施設がある。

[2] 由来不明。
[3] 由来不明。
[4] 由来不明。

[5] ドゥニ・ディドロ（Denis Diderot, 1713- 1784）は、フランスの啓蒙思想家・作家。『百科全書』を刊行。
[6] リヨン駅はリヨン市に向かう駅と言う意味で、リヨン市にはリヨンという名の駅はない、とか。
[7] 「オーストリア領（現チェコ領）モラヴィアのブルノ近郊の町アウステルリッツ（現在のスラフコフ・ウ・ブルナ）郊外で、ナポレオン率いるフランス軍（大陸軍）が、オーストリア・ロシア連合軍を破った戦い、アウステルリッツの戦い（1805）」のアウステルリッツか？

経由してボルドーに至る路線の起点。この駅を使う機会は今までない。

オピタル通りからすぐにサン・マルセル通り（Boulevard Saint Marcel[8]）、その続きのアラゴ通り（Boulevard Arago[9]）、さらにフロワドヴォー通り（Rue Froidevaux[10]）からモンパルナス駅（上の写真）へ。（この辺りを通った頃はとっくに真っ暗で通り名のプレートは読めない。あとで地図を見て書いている。）

モンパルナス駅は、主にフランス西部、南西部方面行の列車の始発駅である。パリから西方向へ向かう路線はサン・ラザール駅始発のものもあり、ヴェルサイユなどへは双方から路線がある。モンパルナス発のものを左岸（Rive Gauche）線、サン・ラザール発のものを右岸（Rive Droit）線と呼ぶ（Wikipedia）。

ずっと昔、サン・マロ（Saint Malo）というドーバー海峡に面した、イギリスのジャージー島に船が出ている、長崎の出島みたいなところで国際会議があったとき、他の日本人何名かと朝の 4 時頃にシャルル・ド・ゴール空港に到着し、そのあとここモンパルナス駅で朝早く電車を待っていた。あのとき始めて自動車レースで有名なル・マン（Le Mans）がパリの西南西にあることを知った。ル・マンを通って電車でサン・マロへ行ったのだ。思えばそのときは TGV でなく、ローカル線で往復したはずで、貴重な乗車経験だ。記録しておけばよかった。

僕たちが乗ったシャトルバスは、夜 8 時前、とても高いビルに面した通りに到着した。空港に着陸してから 3 時間。この前 3 月に来たときもそうだったが、バスでのパリ入りは、渋滞を覚悟して 2 時間や 3 時間はみなければいけない。やはりタクシーが便利だ。明るいうちならパリ交通公団（RATP）の RER[11] でもいいが。

バスの中にいたのは 1 時間半程度だろうか。ヘトヘト、とまではいかないが、とてもじゃないが知らない駅で荷物を引きまわしながら今から地下鉄駅を探して地下鉄で移動する気にはなれなかった。ましてや、日本にいるとき思っていたように、ホテルまで歩くか、などは論外。明るくて、元気で、荷物がなければ歩くかという気にもなるだろうが。

道の反対側の高級そうなホテル（Hotel Meridien Montparnasse）の前のタクシー乗り場でタクシーを待つ。やや暗いさびしい通りで、タクシーなど来るかと若干不安だったが 10 分ほどで到着。

どの道を通ったか今さら辿れないが、線路沿いを通った記憶があるので、それはヴェルシンジェトリ通り（Rue Vercingetorix[12]）だろう。そこからおそらくヴイエ通り（Rue de Vouillé[13]）へ右折し、いつの間にかヴォージラール通り（Rue de Vaugirard[14]）にあるホテルに着いた。ホテルは地下鉄のコンンヴァンシオン（Convention）駅より北側（つまり市中心部側）の西側に面しているから、タクシーはいつのまにかヴイエ通りをはずれて路地を進んだのだ。€12。ボラレる[15]こともなく、善良な運転手だった。

Avenir Hotel。通りに面しているのはドア 1 枚で、奥まったところにカウンターがある。30 代と思える男性がひとり。チェックインをする。カウンターの脇には二人掛け用のソファーが置いてあるが、マガジンラックと新聞ラックとフランスのどのホテルにもおいてある夥しい数のパンフ類のラックが、足の置き場所をなくすように置かれ、座る気にさせない。

カウンターの奥の、椅子をテーブルの上に逆さに置いて片づけてある、すでに電灯を消した部屋が朝食会場らしい。他にそれらしい空間はない。

部屋は 2F、つまりこちらで言う 1F の 12 号室。M 君は 3F とかで、狭いエレベータで上がる。僕は階段で上がる。階段は暗く、2F へ上がったところの壁に電気のスイッチがあることが、踊り場の窓から入る外からの明かりでわかる。12 号室は左方向。すぐにドアがあり、開けるとそこにもうひとつの空間がある。そこで左側を向くと 11 号室のドア、正面が 12 号室のドア。

キーは昔ながらの鍵穴に入れて回すやつ。僕は意外とこれが苦手で、今回も開けられずに一度カウンターのお兄さんを呼びに行った。

---

[8] オピタル通りに聖マルセル教会ってのがある。

[9] このアラゴか？→フランソワ・ジャン・ドミニク・アラゴ François Jean Dominique Arago（1786– 1853）はフランスの数学者、物理学者、天文学者で政治家である。物理学では光学や創成期の電磁気学に寄与。

[10] 由来不明。

[11] RER はフランスの公共鉄道網。「急行鉄道網」（Réseau Express Régional）の略だが、正式にはイル・ド・フランス地域圏急行鉄道網（長い！Réseau Express Régional d'Île-de-France）というらしい。イル・ド・フランスは首都パリを中心とする地域圏のこと。

[12] 由来はこれか→ウェルキンゲトリクス（紀元前 72-紀元前 46）は、ガリア（現在のフランス）に住むケルト人（ガリア人）で、古代ローマのガリア侵略に対して抵抗した人物。フランス最初の英雄と称される。「ヴェルキンゲトリクス」、「ヴェルチンジェトリクス」、「ヴェルサンジェトリクス」とも表記される。本文中の「ヴェルシンジェトリ」は Google map 上の記載。

[13] という名のフランスの都市があるが、関係ありか？

[14] 由来不明。

[15] ぼる：〔「むさぼる」の略とも「ぼうり（暴利）」の動詞化ともいう〕法外な料金を取る。不当な利益をむさぼる。

部屋はシンプル。ベッド、木製のロッカー、小さな木製の机、そしてそれだけはモダンで異質なテレビ。窓の外はすぐ隣のビルで、アパートらしく、開けた窓からオレンジ色の光と家庭の声が漏れて来る。風呂＆トイレ、つまりバスルームは古いが広い。ベッドは一人には十分広く、クッションは問題ないだろう…。要するに、机が狭くて作業をする気にはなれないだけで、一泊宿をとるには全く問題ない。

今回の一行は同じ会社の違う部署から合計 5 人。僕ら二人は同道だが、他の三人のうち一人は僕らより一本早い便で、一人は先にスイスで用事を済ませて、そして残り一人は南仏モンペリエでの別の会合に出席後、ばらばらとパリ入りしてきた。そこで、明日のフランス側との仕事打合せをあらかじめ今夜 9 時に約束していた。

ロビーは有って無きが如しで、5 人がひそひそ話をするスペースがない。仕方がないので外でということになる。まだ 9 時だというのにこの辺りはすでに多くの店は閉店している。KYOTO という、アジア料理を出す店あり。1 軒のカフェを見つけ、ビールを飲みながら書面確認など済ます。

ホテルの部屋へ戻って、荷物を少し入れ替える。今夜一泊し、明日は別のホテルに泊まって、明後日またここへ戻って来る。とりあえず明日着ていくシャツとネクタイなどを出しておくだけだ。日本ではまだクールビズでノーネクタイの時期だが、ここではそういうわけにもいかないだろう。机が狭いこと以外の不便なことはインターネット接続が出来ないこと。まぁ、一日くらいメールチェックできなくていいだろう。就寝は 11 時頃、日本時間朝の 6 時か。

（今日の出費）

【現金】ローズライナー 3,000 円、デルフィーヌへのみやげ 3,500 円、パリ空港バス往復 €27、タクシー €12、ビール €20

9 月 28 日（月）快晴

朝 5 時頃に起き出す。バスタブに湯を張り、ゆっくり入る。あまり寒くない季節だからいいが、真冬はこの浴室は寒かろう。インターネット接続を試してみるも結局不可。ビジネスホテルじゃないから仕方ないですな。

朝食は 6 時半からだが、パリはこの時期明るくなるのは 7 時過ぎだ。7 時半頃にロビー階へ降りて、昨夜は暗かったロビーの奥の部屋へ。すでに同行の二人が朝食を始めていた。去年の今頃サクレ・クール寺院の近くのホテルで食べたときと同じで、ステンレス製のプレートにバゲット一切れとクロワッサンひとつ。あとはコーヒーかカフェオレかティーかを給仕のおばさんに告げる。つまり、このホテルの朝ご飯の用意は、パンを温めるのと、コーヒーを入れミルクを温め、お湯を沸かすこと。まぁ、典型的なパリの安宿の朝食だ。€6。価格破壊中の日本よりは高いか。

同行のひとりが言うには、昨夜彼の部屋のブレーカーが落ちた。部屋中の電燈が当然消えたのだが、テレビの電源だけは落ちなかった。先にも書いたが、テレビだけは新しく、後付けで配線したのだろう。何せ部屋内の電気といえば、部屋とバスの電燈、バスに備え付けのヘアドライヤー、そしてテレビだけだ。もちろん部屋の明かりと言っても日本のように天井に煌々と明かりが付いているわけではなく、ベッドサイドと机の上においてある電燈くらいのものだ。ホテルには修理を頼んだらしいが、明日の夕刻戻ってくるまでに修理されているだろうか。

9 時、約束通り今日訪問先の会社が手配したタクシーが 2 台、ホテルへ迎えに来る。分乗して、パリ西南郊外へ。

昼食は会社のレストランの客用の部屋で、いつものごとくワインが出る。

夕方、会合が予定より半時間ほど延びて終了し、先方の担当者の車で今日宿泊予定のホテル、NOVOTEL へ。このホテルはもう何度も経験した。三ツ星ホテル。今日の宿泊レートは€169 との表示（¥22,000！）。「未来ホテル」とは倍違う。もちろん僕らは事前に予約してあるから€169 よりは低料金である。

フランスと言えば、ずっと昔来たとき、シャワーは水か熱湯しか出ず、隣部屋との壁が薄いために本人部屋の両隣り同士が会話をしていたという、パリ東部の街ランス（Reims）の Hotel Nord（北ホテル？北の宿？）か、昨日泊まった「未来ホテル」しか知らない今回同行した M 君は、このすばらしい（？ まともな？）ホテルに感心。

チェックインして部屋へ入る。スタイリッシュな部屋だ。一泊では当然勿体ない。大きなベッドが二つ。各国からの訪問客を迎えるから、当然ビジネス対応。すぐにインターネットに接続。プロバイダーの Orange に 24 時間の接続。間違えてプラス 1 時間。メールチェック。

今回のディナーはこのホテルのレストランではなく、外へ出掛けるらしい。もう一度 2 台に分乗して会社の近くにある小さな村へ向かう。この村は初めてだ。Google map で見てみてもどの村かわからない。訪問している会社の社員は当然多く住んでいるとのこと。村内の道路はクネクネしていて、動いているうちに方向がわからなくなるが、それにしても今回われわれの担当者で、運転しているカトリーヌ（Catherine）はどうも方向音痴らしい。今日会社からホテルへ向かう時も、そして今ホテルからレストランへ向かう時も道に迷った。

昨年 7 月に南仏の実験場を訪ねたときもそうだったが、田舎町だというのに、しっかりした料理を出す店があるのには感心する。これが食文化というものか。後で聞くと、月曜日はレストランは原則休業なので、店を見つけるのに苦労した結果だがラッキーだったと云っていた。（昨年 2008 年 7 月の訪仏については文末【付録】参照）

フランス側 7 名、日本側 5 名。フランス側 7 名のうち、2 人は日本語を解する。ひとりは昔から付き合いのある、日本語の達者なオッシェム（Ochem）さん、もうひとりはかつて家族ぐるみで 1 年間当時のわが社に留学していたガレ（Gallé）さん。カトリーヌも 10 回程度は日本に来ているはず。

料理は鴨。日本文化がこのところフランスで大人気で、当たり前の風景になってきたと話題になる。料理はもとより、アニメやコスプレも。オッシェムさんが持っている電子辞書には「イケメン」も載っていることがわかった。

9 時頃散会。日本では朝の 4 時。道理で眠いはずだ。ホテルに送ってもらい、メールをチェックして眠る。

（今日の出費）

【カード】ホテル（Avenir）€86（部屋 80＋朝食 6）

9 月 29 日（火）曇り、少々雨

「エールフランスとペンギンの記.pdf」に書いたように、このホテルは、宿泊者がインターナショナルだからだろうが、朝食メニューもインターナショナルというか、無国籍。

会合 2 日目。予定の時間を少しオーバーして 2 日間の会合は終了。手配してくれたタクシーに乗り込んで、一昨日宿泊した未来ホテルへ。明るいうちに到着、改めてチェックイン。今回はチェックイン時に料金を支払えとのこと。確か全員一昨日と同じ部屋だった。

今日はデルフィーヌと夕食の約束をした。7 時に迎えに来る。それまでまだまだ明るそうなので、5 人のうち 4 人でビールでも飲もうと出掛ける。残り 1 人はお疲れでホテルで休憩。そうそう、一昨日のブレーカーは修理されていたとのこと。

日没前のアフターファイブ。地下鉄コンヴァンシオン（Convention）駅のある、コンヴァンシオン通り（Rue de la Convention）とヴォージラール通り（Rue de Vaugirard）の交差点は、帰宅途中の人々が立ち寄る賑やかな、しかしうるさくない一角だった。その角に面したカフェのテラスで男 4 人ビールを飲む。注文のときやや手間取ったためか、中年の男性店員は釣りを細かいコインで返す嫌がらせに出る。

7 時が近づき、M 君と二人ホテルに戻り、迎えに来たデルフィーヌの車に乗り込む。ふと見ると妊娠中のお腹が付き出ている。あまり目立たない人とそうでない人がいるが、彼女は細身だけにとても目立つ。その体で運転してきた。

例によって店の選択は彼女にお任せで、ビールを飲もうとだけ伝えた。いつものようにパリの街をクルクルと動き、いつものように店の回りに何とか 1 台分の駐車スペースを見つけ、いつものように天才的に縦列駐車をする。お腹が大きくても車間を測る感には関係ないみたいだ。連れて来てもらった店は、

Le Timbre Poste
1 Rue Rouget de L'Isle
92240 Malakoff
www.　autimbrepostecafe.com.

店名の Timbre Poste は直訳だと「切手ステーション」。所在地マラコフはパリ市ではない。パリの南に隣接する街のようだ。環状道路のヴァンヴァス入口（Porte de Vanves[16]）を出たところ。角に位置するこの店からパリの方角を眺めれば、ほんの数十メートル先がパリ市との境界だ。

テラス席に 3 人が落ち着く。店はメニューが豊富で、店内を覗いた限り親しみやすい感じだった。店員も丁寧でいい。何を食べたか忘れたが、ビールをお代わりしたことは覚えている。デルフィーヌはビール好きだが小さいサイズ（25 cl =250 cc）にしていた。それは妊娠しているからではなく、飲酒運転に注意ということだろう。妊婦になっても危険だと思わなければ飲酒して運転する。タバコはやめていた。14 歳から吸い始めて 38 歳に至る今まで 3 ヶ月以上やめたことはない、その私が禁煙していると。

ホテルのことを聞かれたので、未来ホテルのことをしゃべると、「2 つ星はダメ。3 つ星でようやくよくなり始める。自治体によって基準が異なるので、別々の場所を比較することはできないが、パリでは間違いなく質が悪いし、一般的に言って 2 つ星はノーグッド。」昨夜の NOVOTEL が 3 つ星ながら結構いいのは田舎のホテルだからか。

9 時頃となり、日本時間は朝 4 時。眠くなって困った。ホテルまで送ってもらう。明日も彼女に会う。今度は仕事で。

（今日の出費）

【現金】ビール€5、夕食€25、

【カード】ホテル（NOVOTEL）€127.3（部屋 114＋朝食 13.3）、インターネット€8.28（24H）+€3.76（1H）、ホテル（Avenir）€86（部屋 80＋朝食 6）

9 月 30 日（水）曇り

昨夜のうちに頼んでおいたタクシーが 9 時ちょっと前にホテル前に到着。パリのタクシーは前日に頼んでおく。

ラテン系に見える若い男性の運転手だった。昨日のように、訪問先の会社のお抱え同然のタクシーではないから、行き場所を示さなければならないが、他の旅行記にも書いたように、デルフィーヌの職場は実にわかりにくく、今までスパッと辿りついたタクシーは一台もない。それで、昨夜飲んだ時にデル

[16] 由来不明。

フィーヌに地図を書いてもらった。彼女はアートだと言ったが、見るからにわかりにくい絵だ。

その絵を差し出した瞬間、その運転手は「正確な住所をくれ」と。デルフィーヌに初対面の M 君が昨夜のうちに名刺をもらっていたのが助かった。その名刺を運転手に見せる。カーナビに打ち込む。無理ですよ、今まで何人のタクシー運転手がそれでお手上げになったことか。

ともかく出発。パリ市の南の郊外のフォンテネ・オー・ローズ（Fantenay-aux-Roses[17]）に向かう。まずはホテル前からそのままヴォージラール通り（Rue de Vaugirard）を南下。環状道路とぶつかる辺りだろうか、2 車線が一部 1 車線になるところで、タクシーがごみ収集車の前に割り込んでクラクションを鳴らされたのを機に、タクシー運転手の怒りが爆発する。

最初は、手のひらを上にして指を突き立てた左腕を窓の外に高く挙げるあの仕草。「何だよ」という威嚇なのか。2 車線に戻って収集車が追いついてきてタクシーと並ぶと、タクシー運転手は収集車に向かってどなり、そして唾を吐く。どうせ届きはしない。今思えば唾が風で車内に戻って来なかったのはよかった。僕は運転手の後ろの席に座っていたのだ。戻って来ないように唾を吐くのが彼のテクニックでもないだろうに。唾を吐かれた収集車の方をふと見ると、助手席側に立っていた緑色のつなぎを着た作業員が、タクシー運転手の方を睨みながら、首の前で右手を真横に振った。「死ね」というサインだろう。

パリのタクシーは面白い。特に街中を走るときは隣の車と接触しそうでしない絶妙のテクニックだ。以前にも書いたかも知れないが、パリのタクシー料金はそのスリルを味わうためだと思っていい。クラクションなどさほど鳴らさないし、鳴らされても平気で鷹揚なものだ。この目の前の運転手はよほど腹にすえかねたのだろう。

われわれに「Sorry」と謝った後は腹立ちまぎれの乱暴運転をするわけではなく、でもそれなりのテクニックですいすいと進む。「どうだ」と言わんばかりだ。

そして案の定、目的地に近付いて迷い始める。あっちこっち行ってみる。途中 2 回デルフィーヌへ電話をする。ようやくみつかる。次回から僕が自分で地図を作ろうか。あるいは電車 RER で来てみようか。

デルフィーヌとは昼食をはさんで 3 時間強仕事の話をする。満足のいく時間だった。日本から持ってきたみやげを渡す。電気仕掛けのおもちゃをその場で動かしてみる。彼女がそれを上司のクリストフの部屋へ持っていったら逆にクリストフがやって来て、「あれをこの前銀座で 5 つか 6 つ買ったよ。知ってるだろ？」と言う。銀座で買い物をしたのは知っているが、同じ物を、それも 5 つも 6 つも買ったことは知らない。

デルフィーヌの部屋で電話をして帰りのタクシーを呼んでもらう。ここでまたそのタクシーがすんなり場所を見つけてくれるかどうかが問題なのだ。3 人で表で待つが、またまた案の定なかなか来ない。迷っているのだ。半時間ほど待ってようやく現れる。大柄な年輩の男性だった。デルフィーヌに、向こう側を走っていたよ、だとか何とか言い訳をしている。それにしてもデルフィーヌは辛抱強い。まぁ、怒っても仕方がないが。再開を約してタクシーに乗り込んだ。すでに午後 3 時頃だった。

モンパルナス駅へ向かう。どこをどう通ったか追跡できなかったが、パリ市内へは、どうも昨日夜食べに行ったマラコフ（Malakoff）から入ったようだ。そのあとは大通りではなく、住宅街、商店街の中をぐるぐると行く。もしかしたらわざと遠回りされたかも。€36.30。初めてのコースだったから記録しておけばよかった。

さてモンパルナス駅到着。夜 11 時半の帰国便に乗るには 7 時頃に空港行きのシャトルバスに乗れば十分。それまで 3 時間ほどこの駅周辺でブラブラすることにした。荷物を預けるロッカーを探す。どうもわれわれは駅の裏口（それもこぎれいなのだが）から入ったようで、インフォデスクで聞いてエレベータで上がったり降りたりを繰り返した後、ようやく駅の正面の地下にあるロッカーに辿りつく。そうそう、正面から入ったコンコースで、昔、ぼんやりと TGV が出入りするのを眺めていたことを思い出した。日本と違って、改札口がないイージーなアクセスを珍しがっていた頃だ。

ロッカー室に入るのに、空港の保安検査場のような金属探知機がある。若いお兄さんがふたり厳しい目でわれわれが入るのを監視。空いているロッカーをみつけて荷物を押し込み、ドアを閉めてコインを入れると、領収書と預かり証を兼ねた紙片が出て来る。それに暗証番号が書いてあり、ドアを開けるためにはその暗証番号を入力しないといけないという大事な紙きれだ。

荷物を預けた後、シャトルバスのバス停の位置を確認。時刻表はないが、30 分おきに出発らしく、7 時頃に戻ってくることを示し合わせて、M 君とは別行動をとる。

僕はかねてから一度は行ってみたい場所があった。それはセーヌ川沿いにある「下水道博物館」（Musee des Egouts）である。

事はヴィクトル・ユーゴーの大作『レ・ミゼラブ

[17] フォンテネ・オー・ローズ：英語版 Wikipedia に記載あり。The commune name originates from a local stream from a spring (*fons, fontaine*) in the hillside descending from the Châtillon plateau, with the addition ("of roses") added to distinguish this commune from numerous French communes named Fontenay. つまり、この辺りの泉（フォンテーン）に発する小川に由来し、それだけではフランス内にあまりたくさんある地名なので、区別のため「バラ」をくっつけた。なぜバラなのかは不明。以前デルフィーヌに尋ねたときも「地名に何も意味はない」と素っ気なかった。

ル』（Les Misérables[18]）に拠る。革命運動に身を投じて傷を負った青年マリウスを追手から逃れさせるため、主人公ジャン・バルジャンが彼を背負って旧中央市場辺りからパリ市内の下水道に入り、官憲の眼をくらますように下水道を歩き回り、ついに地表に出た地点がアルマ橋（Pont de L'Alma[19]）の脇。ここに今下水道博物館が出来ている。

モンパルナス駅からアルマ橋に向かう。歩きか地下鉄か RER かだ。今思えば向かう時に地下鉄を使い、歩いて戻ってくればよかったのだ。アルマ橋まで距離を見誤り、閉館時間である 5 時には間に合わないことに歩いている途中に気付いた。

モンパルナス駅からまずはエッフェル塔を正面遠くに見ながらセーヌ川へ向かって、つまり北に向かって歩く。パスツール通り（Boulevard Pasteur[20]）である。この道は正確には北北西に向かっており、途中ルクルブ通り（Rue Recourbe[21]）ーセーヴル通り（Rue de Sèvres[22]）と交差するところで真北に向かうブルタイユ通り（Avenue de Breteuil[23]）へ入る。正面がアンヴァリッド（Hôtel des Invalid[24]）だ。ブルタイユ通りはアンヴァリッドに裏から近づくことになるのか。この通りは真ん中に大きな芝生帯があり、人々が気ままに輪を囲んだり、寝転がって音楽を聞いていたりしていた。

アンヴァリッドに突き当たり、トゥールビル通り（Avenue de Tourville[25]）へ左折、陸軍士官学校広場（Place de l'Ecole Militaire）へ。ここでエッフェル塔を目印にすることはやめ、ボスケー通り（Avenue Bosquet[26]）を北上、ついにアルマ橋に出る。

実は下水道博物館には過去 2 度来たことがある。いや、正確にはこのセーヌ川畔まで 2 度来たことがある。博物館に入ったことはない。事前にきちんと調べればいいものを、開館時間に間に合わなかったか、閉館日に来てしまった。どの建物が入口かは知っている。それにしてもわかりにくい。右の写真がそれだが、ガラス張りで中が見えるから切符売り場だろうと想像もつくものの、閉館するとガラスの部分は全部閉じられて、ただの六角形の小屋みたいにしか見えない。写真の青い部分に「Egouts」何とかと書いてあるが、それが下水道の意味と知らないと、博物館とはわからないだろう。

そしてやっぱり今日も閉まっていた。5 時は過ぎていた。3 度目にしてまたもや成就せず。次回に、次回に。というわけで僕はガラス張りの状態の小屋を見たことはないわけだ。写真でしか知らない。

この博物館は何年か前から日本人観光客の間で静かなブームらしい。ウェブで検索すると訪問記がたくさんヒットする。観光案内としては、たとえば、http://www.parisjoho.fr/spot/23_egouts.html（上の写真も）。歌川さんという方は『レ・ミゼラブル』の記述に従って、ジャン・バルジャンの下水道逃避行を地上踏査している（http://nippon.zaidan.info/kinenkan/moyo/0000274/moyo_item.html, 1999 年）。僕もいずれ辿ってみようか。この記事は無断転載が厳に禁じられているので、残念ながらここには転載しない。

村上さんという方は「パリの下水道　ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』とその周辺」と題して、下水と下水道の整備の観点から論説し、博物館も訪れている（http://members.jcom.home.ne.jp/tomura/murakami/funnyou6.htm）。因みに村上さんが参照された、岡並木著『舗装と下水道の文化』（論

---

[18] 昔は『ああ無情』と言っていたなと思って調べてみた：原題 *Les Misérables* は、「悲惨な人々」「哀れな人々」の意味であるが、黒岩涙香（くろいわるいこう）の訳した「ああむじょう」は Les Misérables の韻をも含んだみごとな翻訳題名として、日本では『噫無情』（ああむじょう）、『ああ無情』の題名が定着した。中国語圏では『悲惨世界』あるいは『孤星涙』と訳されている。

[19] クリミア戦争のアルマの戦いにちなんで命名された。1997 年、ダイアナ元英国皇太子妃が事故死したのはこの橋の近く。クリミア戦争（1854-1856）は、ナポレオン 3 世時代、勢力が衰えつつあったオスマン帝国の利権を巡って、フランス、オスマン帝国およびイギリスを中心とした同盟軍及びサルデーニャ（現イタリア）とロシアとが戦った、近代史上稀にみる大規模な戦争。ウクライナ共和国である黒海北岸のクリミア半島が主な戦場となったのでクリミア戦争と呼ばれる。その中のアルマの戦いでは、アルジェリア人を含むフランス外人部隊がロシアと戦った。ゆえに、アルマ橋中央の橋脚にはアルジェリア歩兵の全身像が立っている。アルマは、ウクライナのクリミア自治共和国の地名。クリミア・タタール語で「リンゴ」の意。

[20] ルイ・パスツール（Louis Pasteur, 1822- 1895）。フランスの生化学者、細菌学者。「科学には国境はないが、科学者には祖国がある」。ロベルト・コッホとともに、「近代細菌学の開祖」とされる。分子の光学異性体を発見。牛乳、ワイン、ビールの腐敗を防ぐ低温殺菌法（パストリゼーション）を開発。またワクチンの予防接種という方法を開発し、狂犬病ワクチン、ニワトリコレラワクチンを発明している。

[21] 由来不明。

[22] セーヴル。パリ市の西南、ヴェルサイユ宮殿への途中に位置する。メートル条約に基づき基準となる「国際キログラム原器」や「国際メートル原器」が保管され、世界時の計測を行なう国際度量衡局も所在する。また、第一次世界大戦後の 1920 年 8 月 10 日に連合国とオスマン帝国の間で講和条約が締結された地でもある（セーヴル条約）。

[23] 由来不明。

[24] 廃兵院。旧・軍病院。地下墓所にはナポレオン・ボナパルト、その息子・ナポレオン 2 世など。

[25]「トゥールヴィル（Tourville）はフランス語圏の地名、人名。「Thori（または Thor）の土地」という意味。著名な提督の名前であり、それに基づいて命名されたフランス軍艦が多く存在する。」とのこと。陸軍士官学校のあるこの辺りに軍事関係の名前を付けたか。

[26] フランス語で「木立ち」。

創社・1985 年）は、僕も、『レ・ミゼラブル』の後に読んだ。あの迫力満点のユーゴーのパリ下水道政策論に触発される人がときどきいるということだ。

アルマ橋の上で、欄干に肘をつきながら、しばしボンヤリと川面や川沿いの建物を眺める。

帰途。アルマ橋をセーヌ川右岸に渡り、地下鉄 8 番線アルマ・マルソー（Alma-Marceau[27]）駅から隣のフランクリン・ルーズベルト（Franklin D. Roosevelt[28]）駅へ。地下鉄 1 番線に乗り換え、2 つ隣のコンコルド（Concorde[29]）で 12 番線に乗り換え、モンパルナス・ビエンヴニュー（Montparnasse-Bienvenüe: モンパルナスへようこそ[30]）駅で下車。これがモンパルナスの地下鉄駅。または 1 番線でコンコルドまで行かずに、ひとつ手前のシャンゼリゼ・クレマンソー（Champs-Élysées Clémanceau[31]）で 13 番線に乗ってもOK だった。駅の数はこちらの方が少ない。

モンパルナス地下鉄駅からモンパルナス国鉄駅までは地下通路を結構歩く。北側から国鉄駅の構内に入ったことになるのだろうか。広い。どこに何があるのかわからないが適当に構内を歩く。3F の東側はガラス張りで、ここから外を眺めるとメリーゴーランドがあった。パリ市内ではときどき見かけますな。

先の駅裏側と違って、正面（北側）と東側は随分賑やかそうだ。しかし、歩き疲れてもう一度歩き回ってみようかという気力が湧かない。しまった。駅の回りも探索すべきだった。

北側の駅前広場は昔は「1940 年 6 月 18 日広場」と呼ばれた。第二次世界大戦中にドイツに侵攻され、ロンドンに逃亡中のシャルル・ド・ゴール将軍が、ロンドンから徹底抗戦を呼び掛ける放送を行った日付に由来する。

椅子が並んだ待合スペースの横の売店でオレンジジュースを買い、一気に飲む。喉が渇いていた。座って休憩していたら、偶然 M 君と出会う。2 人で地下のロッカールームへ。荷物を取り出し、バス停に向かう。20 分ばかり待ったろうか。バスに乗り込みいざ空港へ。バスは、来る時もそうだったが、エアコンと室内灯が効かず、暑い。

今回は通過経路を確認しておこう。駅横を出発したバスはまず駅の西南に隣接するサークルへ入り、ぐるっと回り、何度か角を曲がったと思ったらコンクリート塀に突き当った。ここを鈍角に右折。このコンクリート塀を左に見ながら進んだと記憶している。これがフロワドヴォー通り（Rue Froidevaux）と思うのだが、Google map で見ると反対方向への一方通行になっている。なぜだ。記憶違いか。フロワドヴォー通りであれば、左手の塀の中がモンパルナス墓地[32]だと思っていたが自信がなくなってきた。

フロワドヴォー通りだと思っておこう。バスは東へ進み、やがて Hôtel de Lion の前を通り、大きな交差点を通過した。地図を見て初めてわかったが、ここが RER B 線のダンフェール・ロシュロー駅（Gare de Denfert-Rochreau[33]）だ。この駅を利用したことはない

---

[27] Marceau:フランス革命期のフランソワ・セヴラン・マルソー・デスグラヴィエ将軍（1769-1796）に由来、だろうと思う。パントマイムのマルセル・マルソーや女優のソフィー・マルソーではないだろう。

[28] ご存じアメリカ合衆国大統領フランクリン・デラノ・ルーズヴェルト。なぜこの人にちなむのかは調べていない。

[29] コンコルド広場の地下にある駅だからコンコルド駅。チュイルリー公園とシャンゼリゼ通りに挟まれたところ。1755 年、Ange-Jacques Gabriel によって設計され、当初ルイ 15 世の騎馬像が設置されていたため「ルイ 15 世広場」と呼ばれていた。その後、フランス革命の勃発により、騎馬像は取り払われ名前も「革命広場」に改められた。革命期には、ルイ 16 世やマリー・アントワネットの処刑が行われた場所でもある。1795 年、現在の「コンコルド広場」という名前で呼ばれ始める（公式名になったのは 1830 年）。広場の中心部には、エジプトのルクソール神殿から運んできたオベリスク（記念碑）がある。「オベリスク」はギリシャ語のオベリスコ（串）から。

[30] Bienvenue なら「ようこそ」なのだが、Bienvenue と Bienvenüe とは違うのか？

[31] ジョルジュ・クレマンソー（Georges Clemenceau, 1841-1929）：フランスの政治家、ジャーナリスト。アメリカで言えば南北戦争時代の人。首相として第一次世界大戦の指揮を執った。

[32] 著書『悪の華』で風紀紊乱の咎で投獄された詩人ボードレール、『第二の性』で女性解放のために戦った哲学者ボーヴォワール、ボーヴォワールの事実上の夫で哲学者サルトル、『女の一生』のモーパッサン、「ドレヒュス事件」の軍人ドレヒュスらが眠る。しっちゃかめっちゃかの歌手・俳優セルジュ・ゲンスブールもここに。

[33] 1879 年、このあたりの広場が、普仏戦争での英雄ピエール・ダンフェール・ロシュロー大佐に因んでダンフェール・ロシュロー広場と改名され、駅もダンフェール・ロシュロー駅と呼ばれるようになった。駅舎は 1846 年の開業当時そのままの建物を使用している。普仏戦争（1870-1871）は、ナポレオン 3 世（ナポレオン皇帝の甥）の第二帝政フランス（1852-1870）とプロイセン王国（後のドイツ帝国）の間で行われた戦争。ドイツ諸邦もプロイセン側に立って参戦したため独仏戦争とも呼ぶ。この戦争の結果、プロイセンはドイツ帝国の盟主としてドイツ全土を支配することとなり、フランスにおいては第二帝政の崩壊と第三共和政の成立、アルザス・ロレーヌ地方のドイツへの割譲という結果が生じた。フランス第三共和政は 1940 年のナチス・ドイツによるパリ占領まで存続。

短編小説『最後の授業』の政治的背景が普仏戦争。

あらすじ（Wikipedia より）：アルザス地方に住むフランツ少年は、学校に遅刻してしまい、アメル先生に鞭で叩かれるのでは、と心配したが、先生は何時になく優しく着席を促した。今日は教室に元村長をはじめ多くの大人たちが集まっている。アメル先生は生徒と教室に集まった大人たちに向かって、自分が授業をするのはこれが最後だと言う。普仏戦争でフランスが負けたため、アルザスはプロイセン王国（ドイツ帝国）領エルザスになって、ドイツ語しか教えてはいけないことになり、アメル先生もこの学校を辞めなければならない。これがフランス語の最後の授業だと語り、生徒も大人も授業に熱心に耳を傾ける。アメル先生は「ある民族

が、以前南の郊外のフォンテネ・オー・ローズから北の郊外のシャルル・ド・ゴール空港へ向かう電車に大きな旅行用スーツケースを持ったまま乗車し、退勤時間帯に鉢合わせになった。そのときの混雑は東京のそれに負けず劣らずだ。

ダンフェール・ロシュロー駅を過ぎた後は、3 日前に市内に向かったときと逆に、アラゴ通りを東へ向い、環状道路へ入って空港へ。混雑もなく意外と早く空港着。

チェックイン、みやげと絵葉書、保安検査。改築されたのか 71 番搭乗口へは初めて通った場所だった。エールフランスのサロンへ初めて入る。広い。落ち着く。成田空港のサロンとは大違いだ。メールチェック。ほんの数日前にフランス出張から帰国した同僚から「またフランス出張。今から乗り込む。」のメール。今頃はロシア上空を飛んでいるか。

搭乗。満席のよう。真ん中の列の通路側の席。左隣の二人の 30～40 歳の男性二人は、今回随分遊びまわったとか。一体何の職業なのだろう。

パリ行きと同じく、帰りも何となく時間を過ごす。映画は観なかった。

（今日の出費）

【現金】タクシー（ホテルから訪問先まで）€25.00、タクシー（訪問先からモンパルナス駅まで）€36.30、モンパルナス駅のロッカー €4.00、モンパルナス駅でジュース €2.00、空港でのみやげ（絵葉書、チョコレート）€39.65

10 月 1 日（木）曇り

夕方 6 時、定刻に成田空港に到着。

お金を使わなかった旅行だった。

（今日の出費）

【現金】ローズライナー 3,000 円

が奴隷となっても、その母語を保っている限りはその牢獄の鍵を握っているようなもの」とフランス語の優秀さを生徒に語る。やがて終業の時が来て、プロシア兵の鳴らすラッパの音を聞いた先生は顔面蒼白。挨拶をしようにも言葉が出ず、黒板に「Vive La France!」（フランス万歳!）と書いて「終了。みんな帰ってよろしい」と手で合図、“最後の授業”を終える。

【付録】

2008 年アリゴとロックフォールと脚の美しい橋の記

2008 年 7 月は、パリではなく、南仏モンペリエから車で 2 時間ばかり北の内陸へ入った田舎町を訪れた。旅行記をひとつ書くだけの中身はあるのだが、未だ書けていない。ここに簡単に書いておこう。

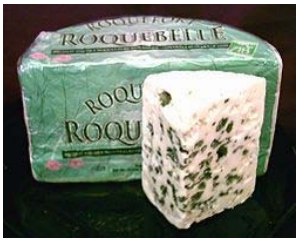
モンペリエ空港で先方の同僚に迎えてもらい、目指す街、ミョー（Millau）へ。着いた時は夜の 10 時頃。先に到着していた人たちと、先方会社の人たちとの夕食に合流した。このとき初めて食べたのがフランス中南部オーブラック（l'Aubrac）地方の郷土料理であるアリゴ（Aligot）。チーズに、ジャガイモのピュレと牛乳とバターとニンニクを加えて練り、糸を引くような状態に仕上げたものに、ソーセージを付け合せたもの。コレステロールたっぷり。横浜にアリゴを出す店があるようです。

翌朝ホテルから車で 30 分ほどの実験場へ。その村の近辺には紹介すべきふたつの場所があった。

ひとつは Roquefort 村。そう、ロックフォールチーズのロックフォール。正式にはロックフォール・スュル・スルゾン（Roquefort-sur-Soulzon）村というらしい。人口 700 人足らずの小さな村であるが、世界 3 大ブルーチーズ（青かびチーズ）であるフランスのロックフォール、イタリアのゴルゴンゾーラ、イギリスのスティルトンのうちのロックフォールの産地。ちなみにロックフォールは羊乳から作られ、ほかの二つは牛乳から作られる。

朝それらしきトラックが次々とその村から出ていく。その村だけは近辺でやたら金持ちなのだとか。村には昔チーズ製造所があった地下洞窟を見物コースにした観光スポットがある。ショップで塊を買って帰ろうかと思ったが、48 時間以内に冷蔵庫に入れるようにとのことで断念した。

（下左の写真は http://www.order-cheese.com/order/501.html）。



もうひとつは橋。フランス中央部、パリから下って来た国道を、南仏にまでつなぐためにタルン川渓谷に掛けた橋、ミョー高架橋（Viaduc de Millau：下の写真は http://www.ozsons.com/Millau.htm より）である。出光興産のちょっと

前のテレビコマーシャル（http://www.idemitsu.co.jp/tvcm/millau.html#anc04）で紹介されていた。この橋は、主塔が東京タワーより高い431mに達する、世界一高い橋として有名だが、フランスが土木技術の粋を集め国の威信をかけて建設したとも聞いた。開通式には大統領も参列。

「タルン川渓谷一帯はフランス中央山塊南東部にある「グラン・コース (Grands Causses) 」と呼ばれる石灰岩の高原地帯であり、パリからフランス南西部、更にスペインへ向かう道路がその上を走っている。ミヨー橋の完成前、フランスの南北を貫く国道 N9 号線を通る自動車は、高原の上からタルン川に向かって高低差300m以上の非常に長い坂道を下り、ミヨーの街の近くを通って再び 300m の高さへ坂道を上がっていた。この坂は交通の難所となっており、特に 7 月後半から 8 月にかけてのバカンスシーズンはパリから南部へ向かう車で激しい渋滞が発生していた。」（Wikipedia）

橋のたもと、橋を見上げるところにはインフォセンターとショップがあり、別に橋を一望できる場所もある。確かに美しい橋だ。その美しさを象徴するのが細長い曲線を描く橋脚である。同行の日本の建設会社に勤務する技術者が言うには、世界最高の建設・土木技術を誇る日本でも、これと同じような橋はできないだろうとのこと。理由はふたつある。

ひとつは地震のため。耐震設計のためには橋脚はあんな細くできないだろう。太っとい大根足にせざるを得ない。もうひとつは、日本の土木界では橋屋よりトンネル屋の方が強く、橋屋が成果をひとりじめするような設計はトンネル屋が許さない。おそらく渓谷の随分手前からトンネルを掘って潜り、渓谷の中腹に出て、ここで橋を渡り反対岸の中腹のトンネルに入り、先の方で地表に出るという設計にするのではないか。結果として橋は渓谷の下の方に、短いのが出来るだけということになる。まぁ、日本のトンネル造りの高い技術力なればこそとも言えるが…。ちなみにこの橋を造ったフランスの会社はエッフェル塔を建造した名門企業らしい。